

竹取翁歌の構造と用字

——「裳」と「藻」の変え字をめぐる——

鈴 木 喬

一、はじめに

『万葉集』には、竹を採ることを生業とする翁が、思いもかけず九人の仙女に出会い、その仙女たちが翁の歌によって心を動かす趣の歌群がある。いわゆる竹取翁歌群(巻⑩三七九一〜三八〇二)である。当該歌群、とくに竹取翁の長歌は、契沖が『万葉集代匠記』において「爛脱せるにやと見ゆる處もおほく極めて意得がたけ」と述べるように、特異な歌句が多く、古くから難解な歌と知られている。また訓読不明句を多く持ち、原文に脱落が起きているのではないかなど、訓み自体を定めることができないことなど難解さの要因は多岐にわたる。

「橋本四郎が「仮名字母の選択にかなり際だった意図が働いているらしい」や「借訓仮名に統一されているために、

特異という印象が強い」と指摘するように、書記において他の万葉歌とは異なるものが看取されている。その書記のあり方を、²山上憶良や³高橋虫麻呂など特定の歌人と結びつけ論じられてきた。また⁴稲岡耕二は、使用される万葉仮名の字母から具体的な書記年代を指摘している。しかし、竹取翁歌において、作歌者の名が記されていない以上、具体的な歌人を引きつけ議論を重ねることの意味は乏しい。夙に⁵倉野憲司が

万葉字者の中には「人麻呂の用字」とか「憶良の用字」とかいふ人々がある。しかしさういふことが果たして言へるであらうか。多少とも万葉集を手掛けた人ならば、現に見る万葉集の表記面が、それぞれの歌の作者の書きとめたものを一字も違へずにさながら採録したものであるまいといふことぐらゐは、すぐに気付く

答

(略)

万葉集の歌はそれぞれの作者が書き記して置いたものなどというやうな、他愛もないことを言ふ人は恐らくあるまいが時折「人麻呂の用字」とか「憶良の用字」とかを耳にするので、さういうものを明らかにすることとは殆ど不可能なことだといふことを言ひたい

と疑義を提示するように、用字から作者を特定することは不可能に近いからである。作者やさらには筆録者の議論を論じて、歌の解釈や内容に影響を与えることはなく、意味をなさない。むしろ徹底した用字意識で文字化される竹取翁歌において、その用字が作品の内容と連関をもち、どのように表現として機能しているか議論すべきである。

統一的な用字の志向がみられる竹取翁歌において、統一性がほころぶ箇所が存在する。「モ」の首節に対し、「裳」と「藻」の二つの訓仮名が用いられるのである。本稿では、その二つの「モ」の万葉仮名について考察し、表現内容を意識した使い分けであることを論じるものである。

二、竹取翁の序文

竹取翁歌群は、漢文による序と、竹取翁の長歌と反歌二首、さらに娘子九首からなる。序では、物語の設定が述べ

られる。序なくして、次の長歌は成り立たない構造になっており、序を含めた一作品として『万葉集』に収載されている。

以下、竹取翁歌の序を掲げる（序および次の長歌の訓読は『新編全集』を掲げた。また序文においては原文を省略し、長歌等の原文は後節において掲げた）。次のとおり物語の場面設定が語られる。

昔、老翁有り、号を竹取の翁といふ。この翁、季春の月に、丘に登り遠く望む。忽ちに羹を煮る九箇の女子に逢ひぬ。百嬌は儔無く、花の容は匹無し。ここに娘子等、老翁を呼び嗤ひて曰く、叔父来れ、この燭の火を吹け、といふ。ここに翁唯々といひて、漸く趨き徐に行き、座の上に着接きぬ。良久にして、娘子等皆共に咲みを含み、相推譲めて曰く、阿誰かこの翁を呼びつるといふ。すなはち竹取の翁謝まりて曰く、非慮る外に、偶に神仙に逢ひぬ。迷惑ふ心、敢へて禁むる所無し。近づき狎れぬる罪は、希はくは贖ふに歌を以てせむと。即ち作る歌一首 并せて短歌

春三月、一人の老翁と、九人の娘子が出会い、老醜を揶揄され、翁が歌を贈る場面である。「近づき狎れぬる罪」とは、身分の低い者が高貴なものに馴れ馴れしく近づいたことをさす。九人の娘子たちは、老翁を火焚き役に行っている。火焚き役などの労役は、身分が低い者が行うことから、

若い娘子たちが老翁に対し、貴賤・上下の関係を構築して
いたことが明示されている。

なお、この九人の娘子が仙女であることは、翁の言葉で
しか看取できない。無論、「百嬌は儔無く、花の容は匹無
し」が異形の存在を形容しているといえる。同じく『万葉
集』において「遊松浦河序」（八五三―八六三）にも神仙
なる女性達との邂逅が描かれる。それに対し、吉田宜は「松
浦玉潭仙媛贈答」と評している。また序に『遊仙窟』の影
響や、⁶天女との邂逅を語る『竹取物語』、『丹後国風土記』
逸文「奈具社」の条などとの関係から仙女である可能性は
高い。さらには『古今和歌集』仮名序の「力をも入れずし
て天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」と
あるように、歌によって仙女の心を動かすという面白みが
ある。

一方で、必ずしも遊仙窟を知らずとも鑑賞でき、享受者
によってそれぞれがイメージできる構造となっている。老
いることなど念頭になく、老翁を愚弄する若者への皮肉と
とることができる。⁷土橋寛が「歌垣や野遊び、その他類
似の行事で老人をからかう風があることは、万葉集卷十六
の竹取翁にも反映している」と指摘し、また⁸伊藤博が「国
見の折、当時の人びとのあいだでは、老人がおのが盛時を
振り返ることで老いを嘆じ、暗に若者たちを戒める風習が
あったのであろう」と言及するように、竹取翁歌の具体的

な作歌状況に関わる指摘がある。どのような歌の場があつ
たのかは、これ以上立ち入らないが、若者の「擲擧」と老
翁の「論し」の応酬における形が、一つの作品を成立させ
ている。

三、竹取翁長歌

次に、竹取翁の長歌部を掲げる。便宜上、長歌部の歌内
容の切れ目に丸数字を入れ、また難読箇所はそのままとし、
現代語訳は拙訳を提示した。

①みどり子の 若子髪には たらちし 母に懐かえ
襜褕の 平生髪には 木綿肩衣 純裏に縫ひ着 頸付
の 童髪には 結ふ幡の 袖付け衣 着し我を には
ひよる 兎らが同年兎には 蝮の腸 か黒し髪を ま
櫛もち ここに掻き垂れ 取り束ね 上げても巻きみ
解き乱り 童になししみ ②さつつかふ 色なつかし
き 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小野の ま榛もち
にほほす衣に 高麗錦 紐に縫ひ付け 刺部重部
（伊藤博の釋注は「さしへかさねへ」） なみ重ね着て
打麻やし 麻績の子ら あり衣の 宝の子らが う
つたへは 経て織る布 日曝しの 麻手作りを 信巾
裳成者之寸丹取為支屋所経（釋注では「信巾裳なす
はばきに取らし 若やぶる」） 稲寸娘子が 妻問ふと

我におこせし 彼方の 二綾裏沓 飛ぶ鳥の 明日
 香壮士が 長雨忌み 縫ひし黒沓 刺し履きて 庭に
 たたずめ 罷りな立ちと 禁め娘子が ほの聞きて
 我におこせし 水縹の 絹の帯を 引き帯なす 韓帯
 に取らせ 海神の 殿の甍に 飛び翔る すがるのこ
 とし 腰細に 取り飾らひ ませ鏡 取り並め掛けて
 己が顔 反らひ見つつ ③春さりて 野辺を巡れば
 おもしろみ 我を思へか さ野つ鳥 来鳴き翔らふ
 秋さりて 山辺を行けば なつかしと 我を思へか
 天雲も 行きたなびく 反り立ち 道を来れば う
 ちひさす 宮女 さすだけの 舍人壮士も 忍ぶらひ
 反らひ見つつ 誰が子そとや 思はれてある ④如
 是所為故為 (釋注は「かくのごと せらゆる故し」)
 古 ささきし我や はしきやし 今日やも兎らに い
 さにとや 思はえてある 如是所為故為 (釋注は「か
 くのごと せらゆる故し」) 古の 賢しき人も 後の
 世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち帰りけり
 【持ち帰りけり】
 ①赤ん坊の 赤子髪の際には (たらちし) 母に抱かれて 紐付
 きおべを纏う 幼児髪の際には木綿の肩衣を 表裏一つに縫つ
 て着た 詰め襟のものを 少年の髪の際には 絞り染めの 袖付
 け衣を 着ていたが 輝くばかりにお美しい 皆様がたと同じ
 歳の頃には (嘘の腸) 真つ黒な髪を 櫛で解いて こちらあ
 たりまで垂らしたり まとめて束ね 上で髻を結つてみたり

また解き乱して 童髪にしてみたりし ②赤っぽい 粋な 色
 目の 紫の 大柄な模様の 住吉の 遠里小野の 襟の突で
 渋く染め上げた衣に 高麗錦の 紐を縫い付け 刺部重部 合
 わせ重ね着て (打麻やし) 麻績の者たちや (あり衣の) 財の
 者たちが 打つ袴というものは 縦糸を 揃えて織る布なので
 すが 日に曝した 手織り麻布を 信巾裳成者之寸丹取為支屋
 所経 稲置娘子が 結納の気で わたしにくれた 彼方の 段
 だら縞の靴下と (飛ぶ鳥の) 明日香壮士が 長雨を避けて
 縫つた黒沓を それらを履いて 庭にたたずんでいましたら
 行かないでと 引き留める乙女が 小耳に聞いて わたしにく
 れた淡藍色の 絹の帯を 小帯みたいに 韓帯に取り付けてく
 れ 海神の 宮殿の屋根を 飛びかける すがる蜂のような
 細い腰に 付けて飾り 鏡を 並べて掛けては 自分の顔を
 惚れ惚れ眺め ③春になつて 野辺をさまよえば 風流だと
 わたしを思つてか 雉までもが 来鳴き飛び回り 秋になつて
 山辺を行けば ああイイ男と 思つてか 雲までもが ゆつ
 たりと遊んで行きます 引き返し 都に戻つて来ると (うち
 ひさす) 女官がたや (さすだけの) 舍人男たちも 流し目で
 ちらちらわたしを見て どちらの御曹司かしらと 思われてい
 たのではないかな ④如是所為故為 その昔 こうも華やか
 に、もてていた私が それがなんということだ 今日皆さん
 に 本當かしらと 思われているのではないかな 如是所為故
 為 昔の 賢人も 後世のお手本にもしよう と 老人を 棄て
 に行つた車を また持ち帰つたとき 持ち帰つたのだ
 長歌の内容は、大きくわけて二つに別けることができる。
 「翁の若かりし頃の様子を語る」部分 (①) (③) と、「翁
 が娘子たちに敬老を諭す」部分 (④) である。④の「古の

賢しき人」以下の部分が、『孝子伝』原穀説話を踏まえて
いることは、夙に『代匠記』に言及があり、また¹⁰西野貞
治によつて具体的に立証され定説となつている。原穀説話
は、老いた祖父を「山中に棄てよ」と父親から命じられた
原穀が、祖父を運んだ手車を、今度は父を運ぶためだと、
持ち帰り、父親を後悔させた話であり、棄老説話の内容を
もつ。④部分がなければ、¹¹廣岡義隆が指摘する「ナルシ
シズムに酔い痴れた青年時代」というような、過ぎ去りし
栄華を鼻につくまでに強調した表現といえる。『孝子伝』
原穀説話をふまえる④を付すことで、歌の内容を大きく転
換させ、さらには娘子たちの心を動かすことになる。この
④の部分が物語性として大きく作用しているといつてよい
だろう。

①から③は、翁の若かりし頃の栄華を誇張的に表現する
が、それぞれの表現内容は少し異なる。①は、髪型を通じて、
今は老醜を持つ一人の男の、誕生からの成長を追う。単に
成長を語るのではなく、身につけていた衣服を並べ、親か
らの愛情を受けていたことを表現する。「木綿の肩衣」は、
暖かい絵裏であり、袖まで着いていたとされる。竹取翁歌
は、「純裏」と、衣服の表と裏を同じ色で仕立てるものを
使用し、②では、綾、高麗錦、麻手作り、絹と布地も贅を
つくし、また多様である。さらに色使いも、紫、模様、榛
染め、白、水縹と多彩な色を使う。

一方で、一般庶民の普段着は、次のような歌にみられる
・紅は うつろふものぞ 橡（うば）の なれにし衣に なほ及
かめやも ⑱四一〇九
紅染めのものは すぐ色褪せるもの 橡染めの着慣れた衣にはや
はり及ぶものではない。

・橡（うば）の 一重の衣、うらもなく あるらむ見故 恋ひ渡
るかも ⑳二九六八

橡の 一重の衣に裏がないように 俺にその気（心）がないらし
い娘だから 恋続けるのだな

黒系統の色の、¹²どんぐり染めの「橡の衣」であった。
二首ともに、女性を想う男性の歌である。一首目は、新妻
よりも、慣れた古妻が良いとする。「橡（つるはみ）」衣が
着慣れたものとして看取できる。二首目は「恋心」を持た
ない女性を、「うら【心】」がない「橡の一重の衣」が序と
して表出している。それぞれ、衣服を序詞として表現する。

翁の若かりし頃を表出する衣装が、これらとかけ離れて
いることが分かる。翁の装束は、『養老令』『衣服令』にお
ける諸臣の礼服と共通することから、¹³尾崎富義が「渡来
の最高職人が作った上級品であり、官人にとつて憧れの
品々であったのだろう。」と述べるように、一流の品々で
あったことがわかる。いわば物づくしのように表現され、
鮮やかで、艶やかな翁の若かりし頃の装いが詠出されてい
るのである。つまり、竹取を生業とする一般庶民の普段着

とは、かけ離れたものであった。ちなみに難読句である「刺部重部」は、「紫の大綾の衣」に対して二つ以上の身に着けるものと考えられている。

翁は「竹取」を生業としていたので、庶民の服であり、おそらくは竹取の作業にもなう汚れがついた作業服であったと考えられる。すなわち、艶やかな「古」と生業にいそしむ「今」の翁との落差が詠出されているといえよう。

さらに②では、男性を拒む二人の女性から贈り物をもらい、その帯や沓によって頭から、足まで、伊達男として着飾ることが語られる。また「髪」や「櫛」、衣服の色彩ばかりでなく「腰細」という語に見られるように『万葉集』において、しばしば女性の描写として用いられている語句で翁を表現していることも注目される。男性の容姿を女性的に表現しているのである。ここでも、老醜を持つ一人の男の「今」と「若かりし頃」との落差を詠出している。

③は、鳥や雲までもが自分に見惚れていたと、翁の若かりし頃がいかに美麗であったかを語り、聞く側が恥ずかしくなるまでに、自分自身に酔いしれていた若き日を語る。ここでは、娘子たちに老醜として蔑まれた「今」との落差が描かれる。

この竹取翁がどのような素性であったかは定かではない。しかし、後半部④の孝子伝を踏まえていたことを考えると、漢籍の知識を有する高貴な人物であったと万葉びと

は享受したのかもしれない。竹取を生業とする老翁と、その若き日の身なりとの落差があり、さらに若き日を滑稽に語ること、ついで娘子たちへの諭しへと展開、そして老醜を持つ翁を揶揄していた娘子たちが、翁の歌によって恋心を抱くなど、展開とその落差から物語としての面白みがあるといえよう。

四、竹取翁歌群の原文

さて、竹取翁歌の長歌と反歌二首、および娘子の和歌七首の原文を掲げる。なお原文は塙書房本によった。(一)で示した漢数字は歌番号である。

① 緑子之 若子蚊見庭 垂乳為 母所懷 襜褕 平生蚊見庭
結経方衣 氷津裏丹縫服 頸著之 童子蚊見庭 結幡
之 袂著衣 服我矣 丹因 子等何四千庭 三名之綿 蚊
黒為髮尾 信櫛持 於是蚊寸垂 取束 舉而裳纏見 解乱
童兒丹成見 ② 羅丹津蚊経 色丹名著来 紫之 大綾之
衣 墨江之 遠里小野之 真棒持 丹穂々為衣丹 豹錦
紐丹縫著 刺部重部 波累服 打十八為 麻續兒等 蟻衣
之 寶之子等蚊 打栲者 経而織布 日暴之 朝手作尾
信巾裳成者之寸丹取為支屋所経 稲寸丁女蚊 妻問迹 我
丹所来為 彼方之 二綾裏沓 飛鳥 飛鳥壯蚊 霖禁 縫

為黒沓 刺佩而 庭立住 退莫立 禁尾迹女蚊 髻髭聞而

我丹所來為 水縹 絹帶尾 引帶成 韓帶丹取為 海神

之 殿蓋丹 飛翔 為輕如來 腰細丹 取飭水 真十鏡

取雙懸而 已蚊臬 還水見乍 ③春避而 野邊尾廻者 面

白見 我矣思経蚊 狭野津鳥 來鳴翔経 秋僻而 山邊尾

往者 名津蚊為迹 我矣思経蚊 天雲囊 行田菜引 還立

路尾所來者 打水刺 宮尾見名 刺竹之 舍人壯囊 忍

経等氷 還等氷見乍 誰子其迹哉 所思而在 ④如是所為

故為 古部 狭々寸為我哉 端寸八為 今日八方子等丹

五十狭迹迹哉 所思而在 如是所為故為 古部之 賢人藻

後之世之 堅監將為迹 老人矣 送為車 持還來 持還

來 (三三九一)

¹⁴反歌二首

死者木苑 相不見在目 生而在者 白髮子等丹 不生在目

八方 (三三九二)

白髮為 子等母生名者 如是 將若異子等丹 所冒金目八

(三三九三)

¹⁵娘子等和歌九首

端寸八為 老夫之歌丹 大欲寸 九兒等哉 蚊間毛而將居

【一】(三三九四)

辱尾忍 辱尾黙 無事 物不言先丹 我者將依【二】

(三三九五)

否園諾園 隨欲 可赦 貞所見哉 我園將依【三】

(三三九六)

死園生園 同心迹 結而為 友八違 我園將依【四】

(三三九七)

何為迹 違將居 否園諾園 友之波々 我園將依【五】

(三三九八)

豈園不在 自身之柄 人子之 事園不盡 我園將依【六】

(三三九九)

者田為々寸 穗庭莫出 思而有 情者所知 我園將依【七】

(三四〇〇)

墨之江之 岸野之榛丹 丹穗所経迹 丹穗葉寐我八 丹穗

氷而將居【八】(三四〇一)

春之野乃 下草靡 我園依 丹穗氷因將 友之隨意【九】

(三四〇二)

長歌だけでなく翁の反歌、娘子の和歌においても、訓仮名によって統一的に表示するという方針が見られる。その方針は「髪」に対する「蚊見」、「には(ふ)」に対する「丹穗」など、語形に対する表記の固定化を実現させる。また訓仮名も、おおよそ一音節に一字という対応がみられ、「はたすすき」の語頭の「ハ」の音節に「者」字をあてるなど、他の万葉歌にない訓仮名の用法例をみることができる。

一方で、「モ」の音節には、「裳」と「藻」の複数の訓仮名が、さらには例外的である音仮名「母」が用いられる。この使

用には、単に「変字法」では説明できない用法をみる事ができる。

「変字法」は¹⁶高木市之助によると「同一句又は類似句の反復に於て、多数の反復字中に、少数の文字だけをとことさらに変へて用ふる一種の用字法」であり、規則性なく文字を変えることをさす。竹取翁歌の場合「裳」は長歌の①③の「翁の若かりし頃の様子を語る」部分において用いられ、「藻」は、三七九八番歌に例外的に「裳」が一例みられるものの④「翁が娘子たちに敬老を諭す」部分から、翁の反歌二首、娘子の和歌二首に集中する。つまり、大きく二つに使用箇所が変わるのである。

五、文脈にあわせた表意兼帯仮名

訓仮名の「裳」は、『万葉集』において竹取翁歌以外にも多く用いられ、「毛」の借訓仮名としては一般的である。

・三輪山を 然も(毛) 隠すか 雲だにも(裳) 心あら
なも(歎) 隠さふべしや ①一八

・ありつつも(裳) 君をば待たむ うちなびく 我が
黒髪に 霜の置くまでに ②八七

右の用例に見られるように、すべて助詞の「も」に用いられ、その傾向は、竹取翁歌とも合致する。つまり、文字の用法としては無標といえる。しかし、巻十六では、竹取

翁歌群以外では訓仮名「裳」の使用はない。

長歌の難訓である「信巾裳」の「裳」は、助詞「も」をあらわさない。全注釈は「ヒラモ」、旧大系が「ヒレモ」、¹⁷橋本四郎は「ヒラミ」ないしは「ヒラビ」と訓み、礼服の上に着る裳である「褶」とする。

「謂、褶者所以加袴上、故俗云袴褶」『令義解』衣服
令

「古記云、褶謂、似婦人裳 褶訓枚帯」『令義解』衣服
服令

右は、衣服令の皇太子・親王や諸臣、内命婦の礼服中に見える記事である。つまり、「信巾裳」もまた普段着ではなく、諸臣の礼服をあらわす。さらに「信巾裳」の「裳」は¹⁸橋本四郎が「下半身の衣類である、という属性の表示を受けもつもの」とし、¹⁹森重敏は「ほとんど戯書といつてもよい文字遣ひによつたもの」とし、字義を意識したものと見える。翁の歌に限れば、青年期の華やかさを髪型や衣服によってその外見を歌う部分に「裳」が使用される。漢字の表音的な機能とともに、「裳」字がもつ、視覚的な表現を意識したものと考えられる。

万葉仮名は漢字の意味を捨象し、日本語の音節を表示することに用いる。竹取翁の長歌部は、漢字の字義を用いた訓字の「裳」と、助詞「も」を表示する訓仮名とが混在した状況といえる。助詞「も」に用いられる「裳」も、縁字

のように字義が意識されている可能性がある。

これは音仮名を使わない当該歌群において、例外的に音仮名「母」を使う箇所がみられることも関連すると考えられる。三七九三番歌において「児らも生ひなば」の句を「子等母生名者」と訓字「子」と連接する位置に「母」字が用いられ、「母子」を想起させた縁字となっている。同様に同三七九三番歌の「将若異（わかけむ）」の「異」も同様の背景をもつといえる。この「異」について、『古語義』は「集中一つの書様と見えたり。ケの言を知らむために、異字を添えたるなり」と指摘するように、「異」字がなくともよい。文脈からいって「異」字も「若く異なる」といった視覚的に詠出したものといえよう。

「裳」が翁長歌の①から③に見られることと、それが老翁の若かりし頃を女性のように華やかに表現していることが、まさに文脈に即したものになっていることから裏付けられる。

一方「藻」の字も、訓仮名としては一般的なものであり、「裳」と同様、『万葉集』において助詞の「も」に用いる。

・ 玉藻刈る 沖辺は漕がじ しまたへの 枕のあたり 忘れ
かねつも (忘可祢津藻)

・ 山のはの ささらえをとこ 天の原門渡る光 見らくし
良しも (見良久之好藻)

また「藻」は、竹取翁歌群における娘子の歌で「よる」「な

びく」などと共起することから、縁字的性格を有しているとも考えられる。訓字の「藻」は、『万葉集』では、

・ 水底生玉藻 打靡心依戀比日 ①二四八二

水底に 生ふる玉藻の うちなびく 心は寄りて
恋ふるこのころ

・ 明日香河 瀬湍之珠藻之 打靡 情者妹尔 因来鴨
⑬三二六七

明日香川 瀬々の玉藻の うちなびく 心は妹に
寄りにけるかも

等の用例に見られるように、「藻」が、水流で「なびく」ことから、心が寄ることを表現する。竹取翁歌の場合も、九人の娘子が老翁の歌によって心を靡かせる。歌の内容を意識したことによる用字の選択として、「裳」ではなく「藻」を用いたものと推測できる。

六、まとめ

以上、竹取翁歌の内容や構造を概括し、用字「裳」と「藻」について言及した。

書かれた結果を観察するしかない状況において、用字から書き手の意識（意図的に字を変えたか否か）を言及することは²⁰難しい。しかし、竹取翁歌群が明確に訓仮名の使用（音仮名使用を排除）を志向している傾向を持ち、音節

「モ」における変字法が、歌の文脈や表現内容と関連していることから、この「裳」と「藻」は、意識的に万葉仮名を変えたものといえる。

竹取翁歌は、平安時代以降の歌物語と関連付けられる。散文部分である序と韻文である長歌が有機的に作用し、歌の表現世界を構築するからである。そのなかで、書記の指向性が顕著な当該歌において、歌の内容にあわせ、万葉仮名を使い分けていた。このことは、視覚的に読まれることを前提に記したものであり、音声だけでなく書くことによつて表現する文学としての性格の一端をみせるものといえよう。

注

- 1 橋本四郎『竹取翁歌の構成とその性格』『橋本四郎論文集 万葉集編』角川書店、一九八六年（初出『女子大國文』十五号、一九六三年）
- 2 松岡静雄『有由縁歌と防人歌』瑞穂書院、一九三五年、中西進『万葉集の比較文学的研究』講談社、一九九五年
- 3 神田秀夫『万葉集の技法』Ⅳ（神田秀夫論稿集3）明治書院、一九八三年
- 4 稲岡耕二『竹取翁歌の用字の年代―借訓仮名を中心に―』『美夫君志』七号、一九六四年
- 5 倉野憲司『万葉集の歌は誰が書いたか』『上代日本古典文学の研究』桜楓社、一九六八年
- 6 三木雅博『竹取翁歌』臆解―現存の作品形態にもとづく主題

の考察』『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』和泉書院、一九九九年

7 土橋寛『記紀歌謡の諸問題』『古事記大成 文学篇』平凡社、一九五七年

8 伊藤博『萬葉集釋注』集英社、一九九八年

9 橋本四郎『竹取翁の歌』『万葉集を学ぶ』第七集、有斐閣、一九七八年

10 西野貞治『竹取翁歌と孝子伝原穀説話』『萬葉』第十四号、一九五五年

11 廣岡義隆『萬葉の竹取翁歌について―その特性と隼人的側面―』『三重大学日本語学文学』八号、一九九七年

12 『日本書紀』持統七年正月条に「詔して、天下の百姓をして、黄色の衣を、奴は卑衣を服しむ。」とある。「卑」は、どんぐり染めをさす。

13 尾崎富義『衣と装飾の民俗』桜井満監修『万葉集の民俗学』おうふう、一九九三年

14 三七九二・三七九三の訓読と意訳は次のとおり。

・死なばこそ 相見ずあらめ 生きてあらば 白髪児らに 生ひざらめやも
死んだなら 見ずに済もうが 生きていたら 白髪が皆さんにも 生えずにいきましょうか

・白髪し 児らも生ひなば かくのごと 若けむ児らに 罵らえかねめや
白髪が みなさんにも 生えたら こんなふうに 若い人たちに 馬鹿にされずにすみましようか

15 娘子等が和ふる歌九首（三七九四～三八〇二）
・はしきやし 翁の歌に おほほしき 九の児らや 感けて居ら

む【二】

ほんとうだわ おじいさんのお歌に 失礼なことをした九人のわたしどもは、聞き入っています

・恥を忍び 恥を黙して 事もなく 物言はぬさきに 我は寄りなむ【二】

恥を忍び 恥と知っていて、女が男に求婚するなんて はしたない ことを言うより前に ますわたしはなびき寄りましょう

・否も諾も 欲しきまにまに 許すべき かたちは見ゆや 我も寄りなむ【三】

「いいえ」も「はい」も 皆さんにおまかせ 無礼を許してくれるご様子でしょうか わたしもなびき寄りましょう

・死にも生きも 同じ心と 結びてし 友や違はむ 我も寄りなむ【四】

死ぬも生きるも みなさんと一緒と誓った友達ですから 異存がありませんか わたしもなびき寄りましょう

・なにすと 違ひは居らむ 否も諾も 友のなみなみ 我も寄りなむ【五】

どうして「反対なんかいたしましょう」「いいえ」も「はい」も皆さんと同じです なびきよりましょう

・豈もあらぬ 己が身のから 人の子の 言も尽くさじ 我も寄りなむ【六】

何の取り柄もない このわたしゆえ 皆さんのように うまくは申せません わたしもなびきよりましょう

・はだすすき 穂にはな出でそと 思ひたる 心は知らゆ 我も寄りなむ【七】

(はだすすき)表にだすまいと 思っていたこの気持ちは、あなたにお見通しです 私もなびきよりましょう

・住吉の 岸野の榛に にほふれど にほはぬ我や にほひて居らむ【八】

住吉の 岸野の榛で 染めようとしても なかなか染まらない私が 同じように染まっていることでしょう

・春の野の 下草なびき 我も寄り にほひ寄りなむ 友のまに【九】

春の野の 下草まで靡くように 私もお付き合ひして まねして従いましょう。皆さんといっしょに

16 高木市之助「変字法に就て」『吉野の鮎』岩波書店、一九四一年

17 橋本四郎「はばき」『萬葉』五十号、一九六四年(『橋本四郎論文集 万葉集編』、角川書店、一九八六年)

18 橋本四郎「はばき」前掲論文

19 森重敏『万葉集栞抄』第二、和泉書院、一九九五年

20 今野慎二「書き手の意識」『国語文字史の研究』八、和泉書院、二〇〇五年

(すずき たかし)